

科学研究費助成事業（特別推進研究）研究進捗評価

課題番号	20001001	研究期間	平成20年度～平成24年度
研究課題名	清朝宮廷演劇文化の研究		
研究代表者名 (所属・職)	磯部 彰（東北大学・東北アジア研究センター・教授）		

【平成23年度 研究進捗評価結果】

該当欄		評価基準
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（評価意見）

本研究は、新しい研究分野である清朝宮廷演劇文化の性格と特徴に着目し、文化史上の意義を明らかにするという目的に即して、順調に進展している。基礎テキストの整備、戯曲の作品分析、清朝演劇の国家統治との関わり、周辺諸国の文化への影響、現代中国の精神文化への影響等、多方面で研究成果を挙げている。これらの成果は、論文集、学会、パンフレット、ホームページ等を通して、広く公開されている。研究の進展に応じて清朝政治史の専門家を加えるなど、研究組織も改善され、研究費の効果的な使用と相まって、着実に研究成果を挙げている。今後、テキストの悉皆調査の見通し、データベース化へのスケジュール等、研究全体の輪郭がより明確に示されれば、本分野のこれからの研究の基礎を築くものとして、本研究期間内に確実な研究成果を挙げるものとする。また、国際研究集会をより頻繁に開催し、英語で海外へ定期的に発信することを心がければ、より多くの実りある研究成果が期待できる。

【平成25年度 検証結果】

検証結果	本研究は、中国清朝における宮廷演劇について、国家行事としての政治的役割という視点を導入しながら、従来ほとんど進んでいなかった実態の把握を大きく進展させた。現在知られる主要作品について、各研究分担者が、それぞれの役割に応じた作品分析を行い、また、中国を初めとする海外調査を通じて新たに発見されたテキストを含む、詳しい梗概をまとめているのは、基礎研究の精度を高めたものとして高く評価できる。宮廷演劇の中国内外に及ぶ文化史的、政治史的意義の解明については、やや総合性に欠ける印象があるが、基礎研究の充実につれて一層の広がりをもたらされることが見込まれ、現段階での到達点を示したものとして評価したい。
A	資料の性質上、成果の全体を英語で発信することは難しいかもしれないが、今後の課題として、梗概など、一部だけでも国際的な利便性をより高める工夫を望みたい。
	なお、東日本大震災における施設の被災にもかかわらず、研究の進捗を止めなかった代表者の姿勢に敬意を表す。

